

図書館へ行こう！

新書って知ってる？

(注！) 新刊書ではありません！！



新書は・・・〇多テーマだから「何でもある」

- 〇広く浅く知るための「お試し版になる」
 - 〇携帯性がいいから「いつでも読める」
 - 〇コンパクトだから「場所をとらない」
 - 〇ロングセラーが多いから「新旧比較できる」
 - 〇信憑性が高いから「安心して読める」
 - 〇アカデミックだから「新鮮な驚きがある」
 - 〇並列的だから「自分の目で選べる」。
 - 〇知りたいことは「全部、新書に書いてある」
- 奥野宣之著『だから、新書を読みなさい』より

学院図書館には新書が約5200冊！！利用してね！

新書とは、サイズが縦17.5cm×横11cm(文庫本よりも少し縦長)、ペ

ージ数200～300pほどの図書です。おもに一般向けの教養書のことを指し、いわば大人の読書への入り口となる本です。最初ははっきり言って「難しそう」「つまらなそう」。でも読んでいくうちに理解できる部分が増え、知識を得ることが快感となってきます。

学院図書館には現在およそ5,200冊の新書がそろっていて、閲覧室入ってすぐ左側の本棚に並べてあります。1ヶ月に最低1冊は新書を手にとり、ぐんぐん賢くなりましょう。

今年の読書の秋は新書を読



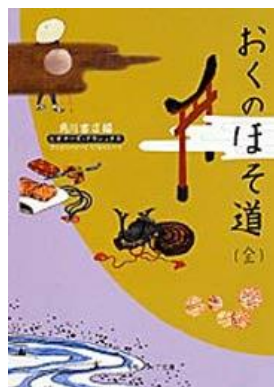
図書館特別展示 『おくのほそ道展』

「奥の細道」の作者・松尾芭蕉は、実際どんな人物だったのでしょうか。

芭蕉は若いころから俳句に親しんでいたものの、本業はあくまでも宮仕え。今でいうサラリーマンでした。勤務先は伊賀上野の藤堂(とうどう)家で、代々 城代家老の家柄でした。ところが仕えていた藤堂良忠が亡くなると芭蕉はリストラの対象になり、失業するのです。そこで本格的に俳人になろうと決意し、江戸に向かいました。

残された記録によると、やがて芭蕉は江戸に定住し点業(俳諧の添削などをする仕事)で活躍します。当時の俳人の生活は相当に経済的に苦しかったと考えられ、芭蕉隠密説が、こうしたところから生まれたようです。

いずれにしても、二十代初めにリストラの憂き目に遭わなかったら、俳人・芭蕉はこの世に誕生していなかったかもしれません。



↑ 展示図書の一部です ↑



↑ 月岡芳年「月百姿」より

三日月のころより待ちし今宵かな



校内読書週間 11/14(月)～21(月)

「読書に関する標語」に、今年もたくさんの標語が集まっています。間もなく行われる生徒図書委員審査会で1枚1枚すべての標語を審査し、結果は次回発行の『図書館へ行こう』で発表予定です。お楽しみに！

← 全国共通の標語です